

内閣総理大臣
安倍晋三様

広島の被爆者の一人として、また、核兵器廃絶国際キャンペーン(ICAN)で全世界の仲間たちと共に活動する者として、被爆国・日本の指導者たる総理大臣をお願いします。核兵器廃絶に向けて、真の一步を踏み出してください。

1945年8月6日、一発の原子爆弾で、私の愛した街・広島は完全に破壊されました。住民のほとんどは一般市民でしたが、彼らは燃えて灰と化し、蒸発し、黒こげの炭となりました。その中には、私自身の家族や、351人の同級生もいました。

原爆で亡くなった一人ひとりには名前があり、愛する人がいました。一人ひとりに尊厳がありました。それは、一瞬で踏みにじられました。

今日、いまだに1万4000発以上の核兵器が世界に存在し、毎日、毎秒、私たちの愛するすべての人を、私たちの親しむすべての物を、危機にさらしています。私たち被爆者は、このことを受け入れることはできません。この異常を、これ以上許してはなりません。

私たち被爆者は、自らが体験したことを世界の他の誰にも味わわせてはいけないという思いで、70年以上にわたり核兵器廃絶を訴えてきました。

志ある諸国政府が、赤十字や、ICANなど世界の市民社会組織と連携して、核兵器の非人道性を訴える運動を起こしたとき、私の心はふるえました。

そしてその運動の積み重ねが実を結び、昨年7月7日、国連で核兵器禁止条約が122カ国の賛同により採択されました。このとき私は、言葉にならないほどの感激を覚えました。人類の最悪のときを目の当たりにした私は、この日、人類の最良のときを目の当たりにしたのです。

核兵器禁止条約は、核兵器廃絶という大きな目標に向けた第一歩です。この条約を、核兵器の終わりの始まりにしなければなりません。

ところが、唯一の戦争被爆国である日本の政府は、核兵器禁止条約の交渉に参加すらしませんでした。そしてこの条約に署名・批准しないことを明言しています。これに対して私は、憤りを隠すことはできません。70年以上にわたり訴えてきた被爆者の一人として、裏切られたと言わざるをえません。日本は、自ら果たすべき責任を放棄しています。

広島・長崎で核兵器がもたらす非人道的な結末を身をもって経験したはずの日本が、自らの安全のためには「核の傘」なるものが不可欠だといつまで主張し続けるのでしょうか。核抑止力とは、核兵器の使用を前提とした脅しの戦略にはなりません。都市を燃やし尽くし、人々を無差別に殺戮し、地球環境を破壊して地球上の生命を消し去る大量破壊兵器が使われることを、日本は容認するのでしょうか。

日本政府は、自らの歴史的、世界的、道義的責任を自覚し、核兵器に依存した政策と決別してください。そして、核兵器禁止条約に署名・批准するという一步を踏み出してください。

日本政府は核軍縮のための「橋渡し」になると言っていますが、核兵器禁止条約の価値を是認せず、核保有国の立場を代弁ばかりするような今日の外交姿勢には、説得力がありません。核保有国の共犯者になっているようにすらみえます。みせかけの「橋渡し」ではなく、核兵器廃絶に向けて献身的に活動している被爆者や市民社会組織との真の対話と協議を深めてください。

核兵器を過去のものとしようとする世界史的な潮流のなかで、正しい選択を行ってください。そのことこそが、広島・長崎で無惨にも命を奪われていった一人ひとりに対する報いとなります。

2018年12月6日

サーロー節子

※12月6日に西村内閣官房副長官に手渡した安倍総理大臣宛の手紙の文面です。

※河野外務大臣宛には、12月5日付外務大臣宛で同内容の手紙を辻外務大臣政務官に手渡しました。